

飛鳥資料館のみどころ（12）

展示品解説 その4 「飛鳥寺の塔の埋納物」

飛鳥寺といえば、我が国で最初に造営された、本格的な伽藍配置を伴う寺院として知られていますが、飛鳥資料館では、その塔跡から出土した遺物を展示しています。

飛鳥寺は仏教伝来から半世紀を経た588年(崇峻天皇元年)に蘇我氏によって造営が始められました。発掘調査の成果によると、ほぼ東西200m、南北300mの寺域を持ち、その西南に塔を中心として三金堂を配した伽藍配置を持っていたことがわかっています。

その造営にあたっては、とくに百濟から寺院建築の専門の技術者を招いて、事業にあたったことが知られています。ところが、この飛鳥寺の塔の心柱を立てた心礎周辺から出土した遺物は、曲玉、管玉、子玉等の玉類、金環、銀環、金、銀の延板・小粒、金銅製飾金具類、青銅製馬鈴、蛇行状鉄器、けいこう掛甲(よろい)、刀子であり、これらはまさに同時期の古墳の出土品そのものといってよいものです。

こうした遺物は、古墳がつくられる一方で、豪

族達の中に仏教が広まりだしたころの様子をよく現していると考えられています。

なお、資料館では、心礎上方2mの位置から見つかった檜の木箱に入った金銅製の舍利容器も展示しています。これは、建久7年(1196)に塔が落雷のため焼け落ち、その翌年に納められたもので、木箱の側板にその年号が墨書されています。文中には、「本元興寺」と記され、飛鳥寺は平城京内に移されて元興寺となり、飛鳥に残ったその後の寺が本元興寺となったことも伝えています。

(飛鳥資料館 清水 洋平)



埋納物の展示